

川崎ジュニア文化大賞受賞作品

「おばあちゃまのさくらんぼ」

梶ヶ谷小学校 5年生 赤嶺 志帆

私の家の庭に、小さな桜の木があります。公園に生えているような立派な桜の木ではないけれど、他の桜より少しだけ早く花が咲き、花が咲いた後には小さなさくらんぼが実る木です。私が小さいころ、亡くなった祖母が大切に育てていた桜です。毎年五月になると、しわしわの手の中にそっと包むようにして一握みのさくらんぼを私に食べさせてくれました。

「こんなちっちゃなさくらんぼだけど、一人前にさくらんぼの味がするのよ。」と言って。

スーパーで買ってくるサクランボのような立派な味はしないけれど、ちょっと酸っぱいこのさくらんぼが私は大好きで、毎年とても楽しみでした。

おばあちゃまのさくらんぼは、近所の鳥たちにも人気です。花の時期には、淡い緑色をしたメジロが、蜜を吸いにやってきます。でも問題なのは、ヒヨドリです。さくらんぼが実るところになると、ヒヨドリたちが集まってきている気配がします。

「そろそろ食べごろかどうか見に来ているんだよ。」

と父はのんきなことを言っていますが、せっかく実ったおばあちゃまのさくらんぼを、赤く熟したのから次々に食べ散らかしていくヒヨドリが私は許せません。そこで私は毎年ささやかな攻防戦をくり広げています。今年は六勝四敗といったところで、つまり六割くらいは収穫できました。収穫した小さな実をていねいに水で洗ってから口に放りこみます。甘酸っぱい味が口に広がって、すぐに消えてしまいます。次から次へと忙しく口に入れないと食べた気がしないのも、おばあちゃまのさくらんぼの特徴なのです。

「この辺りは、昔から梨もよく栽培されていた土地柄だから、水はけが良くて良く育つのかなあ。」

と父も一緒にさくらんぼをつまみながら、話してくれました。そういえば、庭の別の隅には、柚子の木が生えていて、でこぼこの小ぶりの実をつけます。冬至には柚子を二十個ほども入れたぜいたく柚子湯に入るのも、おばあちゃまと私の楽しみの一つでした。

川崎の町には、父と母が結婚したころに、世田谷の三軒茶屋というところから引っ越してきたそうです。三軒茶屋の便利なくらしに慣れていたおばあちゃまは渋い顔をしていたそうですが、越してきてからはすっかりこの町が気に入りました。緑が多く、メジロやオナガやヒヨドリが遊びにくるようなところが好きになったとよく私に話してくれました。さくらんぼの木も柚子の木も、小さな苗から育てたそうです。

私も、今度何か実のなる木の苗を植えてみようと思います。食べられる実ができるまでに何年かかるかわかりませんが、楽しい未来のための投資といったところです。

やがて私も結婚して子供ができたり、そして孫ができたりした時には、この川崎の町に住み、皆で一緒にさくらんぼを食べたり、柚子湯に入ったり、そんな未来にしていきたいなあ、とぼんやり考えています。